

論文

中山間地域における生活文化を見直す住民活動と 公民館・地域外部者の関わり

－ 浜田市弥栄自治区における「石臼供養」の実践から －

土 田 拓*・塚 本 孝 之*

A Report on the Activities to Re-realization of Life and Culture by the Locals, Social Education Facility Staffs
and Outside People in Mountainous Region
: A Case Study of “Ishiusu-kuyo” in Yasaka District, Hamada City, Shimane Prefecture

Taku TSUCHIDA* and Takayuki TSUKAMOTO*

要 旨

現在、住民を主体としながらも、地域内外の多様な主体の関わりの中で、地域を見つめなおす活動が各地で展開されている。本稿の目的は、そのような場面において、生活文化を通して表れた地域の想いを受け止める組織・人材の必要性と課題を探ることにある。具体的には、浜田市弥栄自治区における「石臼供養」の事例報告を通じて、そこに関係した主体の整理を試みた。その結果から、①住民の想いに対し、臨機応変に応えられる場として公民館が機能していたこと、②今後、連携が予想される地域外部者の関わり方について、地域の想いを受け止める姿勢によって住民の主体性を確保する必要があること、の2点を指摘した。

キーワード：中山間地域，生活文化，公民館，地域外部人材

I はじめに

現在、研究や学習等の実践を通じて住民自ら地域を見つめなおす活動が、農山村やいわゆる中山間地域を中心に展開されている。こうした実践には、地域住民に加えて、「公民館」¹⁾、さらには、研究者などの「専門家」²⁾等、地域外部の人材・組織が関わることも少なくない。

このように地域外部を含めた多様な主体が連携・協働関係を構築・活用し、様々な地域活動等を展開することは、当該地域に対して一定以上、プラスの効果をもたらすものと期待することができる。例えば、敷田は、「よそ者」という視角から、地域づくりにおける様々な「よ

そ者」の定義や特性を示し、「よそ者」が、①技術や技能などの知識の地域への移入、②地域のもつ創造性の惹起や励起、③地域の持つ知識の表出支援、④地域（や組織）の変容の促進、⑤しがらみのない立場からの問題解決の提案などの効果をもたらすことを指摘している。³⁾

一方、総務省が示した地域力創造プランにおける「集落支援員」や「地域おこし協力隊」、農林水産省における「田舎で働き隊！」事業等に代表される人材配置の支援を軸とした政策展開も追い風となり、地域内外を問わず、幅広い人材や組織が中山間地域の維持・保全、または地域の課題解決、様々な地域の活動等に対して実践的

* 島根県中山間地域研究センター客員研究員

に関わることが各地で期待されている。

本稿は、島根県浜田市弥栄自治区において行われた「石臼供養」の活動（2009年6月～）を事例として報告し、地域内外の主体の関係について整理を試みる。この作業を通じて、生活文化を通して表れた地域の想いを受け止める組織・人材の必要性や課題、求められる姿勢や視点について検討する。

II 弥栄自治区における「石臼供養」の実践

まず、本稿でとりあげる「石臼供養」が行われた浜田市弥栄自治区、および「石臼供養」をめぐる活動について、その実際を概観しよう。なお、以下では、石臼の供養そのものと記録作成等の諸活動を合わせた全体を指す場合、括弧を付して「石臼供養」と表現する。

1. 浜田市弥栄自治区

2005年10月1日、「平成の大合併」に伴い、旧浜田市ならびに、旧那賀郡（金城町、旭町、弥栄村、三隅町）計5市町村の合併によって浜田市が誕生した。この浜田市においては、合併後も旧市町村単位で権限や予算の一部を引き継ぐ「自治区制度」を導入しており⁴⁾、本稿で取り扱う「浜田市弥栄自治区」は、このうち、旧弥栄村部分を示している。浜田市弥栄自治区は、島根県浜田市南部に位置し、周辺は山岳で起伏に富んでおり、典型的な中山間地域である。

現在、自治区内には27の集落があり、浜田市住民基本台帳（2010年2月1日現在）によると、人口は1,576人、世帯数は724である。この弥栄自治区は東部の「安城」地区と西部の「杵束」地区の、いわゆる昭和の合併以前の旧村単位で大きく2地区に分けられる。このそれぞれの地区に公民館が設置されており、各種地域活動が積極的に実践されている。

2. 石臼供養の取り組み

1) 石臼の供養

「石臼供養」は、弥栄自治区に暮らすある古老が、供養の当日に安城地区の公民館（以下、安城公民館）を訪れ、石臼の話をしたことに始まった。その場に居合わせた公民館関係者、及び筆者ら地域外部の人間が、急遽、石臼供養に参加することになったのである。



写真1 集会所前に積まれた石臼

表1 石臼供養の塚の隣に設置された案内板のことは

「臼供養」
石の摺り合せにより穀物を粉末にする知恵と工夫は食文化の進化と共に生活の道具挽臼として生れ、その起源は遠く古代に遡る。
米麦、きび、そば、豆、煎物等の粉挽き、豆腐作りと、年中多用に使われており主に婦人の細腕にまかされ、何千何万と回され摺り減った臼には婦人達の労苦が染みこんでいる。
時代と共に使用者もなくなり中には漬物の重石に早変わり、挙家離村の廃屋には置き去りにされ、腐る事もなく一人淋しく眠っている。
我が身を摺り減し役立ってくれた臼に感謝し今呼び起し光を与へて上げたい。

注：原文のまま。

場所はその古老が暮らす集落の集会場前である。参加者が足を運んだ時には、すでに集落内外で集められたいくつもの石臼が積まれた状態にあった（写真1）。

供養当日はここへ僧が招かれ、ビール等を供えた後、読経が行われた。その後卒塔婆を立て、この日の供養を終えた。

2) 塚の建立から記録作成まで

供養後もその古老を中心に使用済みの石臼が収集され、後日場所を移して供養石臼の塚が立てられることになった。それにあわせて案内板も設置された（写真2）。そこには、表1に示すとおりの記事がなされ、この活動に対する住民の想いが端的に表現されている。

この塚の建立と案内板の設置に際して、地域外部の人間と公民館から、弥栄自治区的生活文化の記録のために、



写真2 石臼供養塚と案内板



写真3 記録作業（実測・拓本とり）の様子

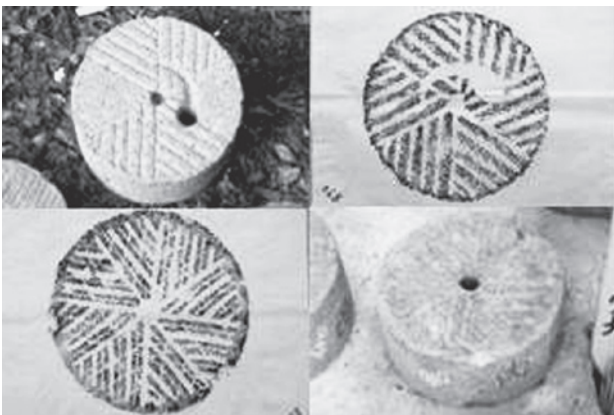


写真4 接写した石臼と石臼の拓本

石臼資料番号	場所	方位	直径(mm)	厚さ(mm)	その他	画像	拓本
001	群馬	下	270	100			
002	不明	下	273	100			
003	不明	上	290	150			
004	不明	下	275	125			
005	不明	上	290	150			

写真5 表計算ソフトによって整理したデータ一覧
注：浜田市安城公民館のPCへと保存・保管。

石臼の目の拓本と、簡単な実測を行うことが提案された。

ここでいう地域外部の人間に相当する筆者らは、弥栄自治区をステージとした、独立行政法人科学技術振興機構（JST）、社会技術研究開発センター（RISTEX）「地域に根ざした脱温暖化・環境共生社会」研究開発領域における研究開発事業「中山間地域に人々が集う脱温暖化の『郷（さと）』づくり」（研究代表者：藤山浩・島根県中山間地域研究センター研究企画監）に際して、地域外部から当該地域へと通い、継続的なフィールドワークを実施している。

古老たちの賛同を得たその記録作業は、塚の土台の施工後、石臼を積み上げる前に行われた。筆者らが拓本の道具一式を準備し、住民・公民館と協働で拓本をとり、簡単な実測と写真撮影を行った。総点数は68点である。また、拓本は乾燥後、後日接写した（写真3、4）。

作業から得られたデータは、表計算ソフトを用いて一覧にまとめ、公民館が所有するパーソナル・コンピュー

ターへと保存している。写真については、表計算ソフト上の石臼のデータ1点ごとに、全体写真と拓本写真のサムネイルを用意し、そこから元データへとリンクをはる形で整理した（写真5）。ここで、専門的なデータベースソフト等を使用しなかったのは、住民の方々を中心とした、今後の持続的なデータの追加や編集作業の簡便さを考慮してのことになる。

3) 石臼の供養はどのように捉えられるか

では、石臼の供養は生活文化としてどのように位置づけることができるだろうか。この点については、本稿の主題ではないため詳しくは述べないが、供養儀礼のひとつとして捉えられるだろう。

供養儀礼のうち、とくに「生業に関わる動物供養や廃物供養には、生業を正当化し、その増幅に歯止めがかけられないという欠陥がひそんでいる」という。また、供養の意図にかつては鎮魂やたたりへの恐怖がみられたが、今日では感謝へと重点が移行し、その結果、生産や

捕獲への歯止めをかけるような予防装置として供養碑はほとんど機能しないであろうと推測されている。⁵⁾

こうした一面を、弥栄自治区における石臼の供養にも看取できる。前述したように、案内板には「感謝」の気持ちが表現されているからである。

さらに、石臼の供養塚建立の活動自体は、多様な主体が関わることにより、結果的に供養という枠を超えて、資料化へと進むことになっている。

Ⅲ 主体の整理

次に、ここまで述べてきた活動の特徴を、①古老ら地域住民、②公民館、そして、③地域外部の人間、といった、関係する主体のあり方に注目して整理したい。

1. 多様な主体の背景

先述したように、石臼供養をめぐる活動に伴う多様な主体の連携・協働は、いくつかの偶然が重なった上での出来事であった。石臼への想いを持った住民、生活文化を通して地域の活力を育もうとする問題意識を持った公民館、筆者ら地域外部者が、思いがけず鉢合わせた結果としての実践だったのである。その意味で、長期的な計画を事前に立てたものではなく、今後の展開は手探りとなる。

2. 地域住民

言うまでもなく、石臼供養は古老ら、地域住民の方々为主体となって進められていた活動である。関係者が増えるのは供養当日からになるが、石臼に対する想いの発露から供養に至るまでの活動を見逃すことは出来ない。石臼という生活文化に対するその想いは、記録作成へと活動が広がっていく過程においても大きな原動力となっていたことがみてとれた。その後も古老らは、拓本やその記録を公民館で行われた行事へと出展・展示している。さらに、「石臼供養」の冊子を発行するなど、供養後の活動にもひろがりが見られている。

3. 公民館

続いて、思いがけず形をなす古老ら住民の想いに対し、臨機応変に応えられる場として公民館が機能していたことも注目される。この背景には、地域において公民館が

以下に整理した3つの役割を担っていることが考えられる。

1つ目は、地域の憩いの場としての役割である（写真6）。この「石臼供養」に多様な主体が関わっていくきっかけも、供養当日に地域住民が安城公民館を訪れたことにあった。2つ目は、地域の想いの受け皿となっていることである。今回は、石臼供養への参加・協力、石臼の目の拓本と、簡単な実測を行うことの提案、加えて、資料・データの保管という形で、地域生活文化への感謝という住民の想いを公民館が受け止めている。3つ目は、地域の人・組織同士の、さらに、筆者ら地域外部の人・組織との繋ぎの場としての役割を担っていることである。始まりは偶然ではあったが、公民館を媒介として、地域外部者との連携・協働関係が生じているのである（図1）。

また、安城公民館は、公民館が培ってきたノウハウを結集し、地域の課題を掘り下げ、その解決に向けた学習・実践活動を実践・実証する島根県の事業「実証！『地域力』醸成プログラム」を通して、地域の資源を見直す活動や地域づくり活動を実施するなど、個人の教養のための学習から一歩踏み出したところで公民館活動を展開している。例えば「柿渋」づくり等、地域に残る生活・知恵・文化を掘り起こし、次世代に繋げる活動である。

山陰・北陸地域の公民館は、小学校区の単位など、歴史的なつながりや地域住民が連携し合える距離に設置されているというメリットを持ち、地域の拠点施設としてまちづくりに向けて取組みが行いやすい地理的・社会



写真6 安城公民館の日常の様子

注：写真左から1番目、4番目が公民館関係者。左から3番目が筆者のひとり。地元住民が集う憩いの場となっている。

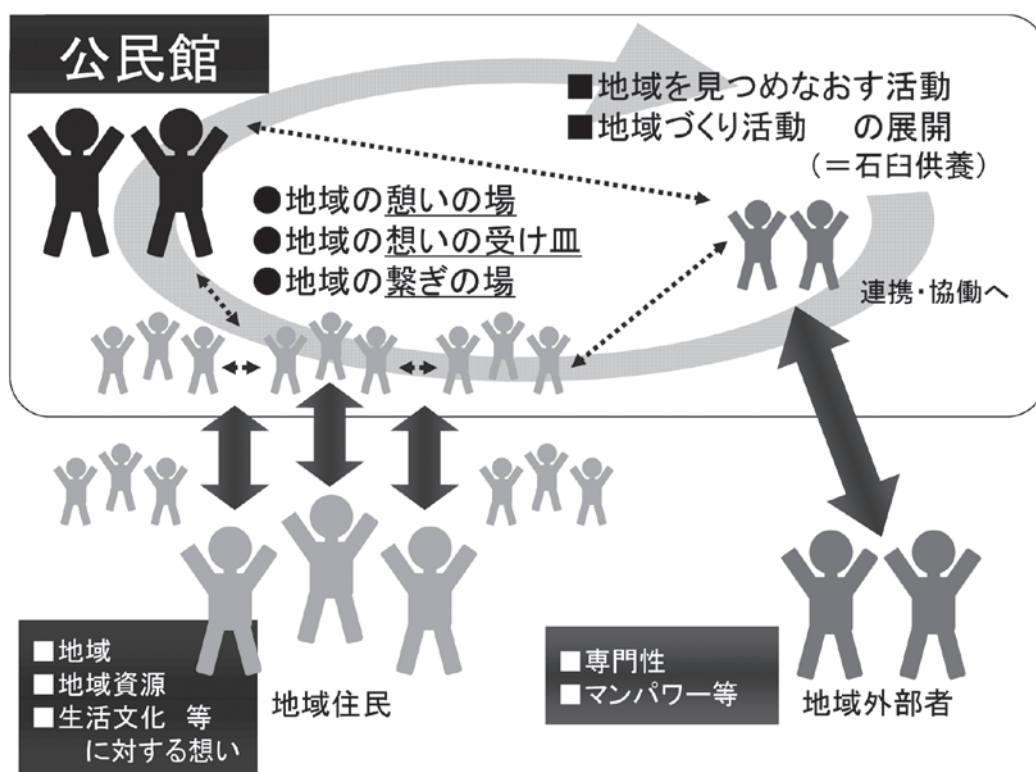


図1 地元住民・公民館・地域外部者の関わりの模式図

注：公民館が日常的に、①地域の憩いの場、②地域の想いの受け皿、③地域の繋ぎの場としての役割を担っていることで、地域外部者も含め、多様な主体の連携を醸成している。

的環境にあると指摘されている。⁶⁾ その傾向の一端を、安城公民館の活動にも看取できた。

以上のような特徴や背景によって、住民を主体としつつも公民館を媒介にして外部の人間が生活記録の作成を後押しする環境が形成・維持されたのである。

4. 地域外部の人材

そして、筆者らは地域外部の人材として、①生活文化としての石臼の記録作成の提案、②道具の準備、③記録の採取、④データの整理・保存、に携わってきた。

このうち、②以外は、地域住民や公民館および筆者らとの連携・協働で進められた。その際、筆者らが注意したのは、バックアップに徹するということである。というのも、地域住民の主体性を確保することが必要と考えたためである。

これについては、坂本⁷⁾が指摘しているように、地域住民が主体性を確保しないままに地域外部との連携・協働活動を行うと、かえって負担が増えてしまうことなどが考えられる。また、敷田が指摘するように、地域外

部者が関わる地域づくりにおいて、「極端な場合には、よそ者主導で地域を変革してしまうこと」³⁾も考えられる。さらに、こうした変革は「『外来型開発』としてむしろ否定されなければならないが、実際には『ろくでもない』よそ者による開発は後を絶たない」³⁾という指摘についても充分留意する必要がある。

これらの議論を踏まえた上でも、外部の「専門家等」による調査研究が、学術的な社会貢献として重要であることはいうまでもないが、同時に、地元住民との連携・協働への配慮、具体的には、地元住民の主体性を確保すること、それを尊重することについても配慮することの必要性を改めて認識しておかねばなるまい。

話を少し進めると、現在、二地域居住などの様々なライフスタイルが提案されている。さらに、はじめに触れた「地域おこし協力隊」等地域外部人材の誘致・配置施策も展開されている。それは同時に、生活文化の継承主体が多様である、とも言い換えられる。こうした背景に伴い、元々そこに居住していた住民を中心としながらも、地域外部の人間も含めた、多様な主体がコミュニティ運

営、地域づくりへと関わっていくことが大きく期待される。そこにおいて、地域住民が、自らの生活文化を見直すことで地域の生活を再認識する実践に臨んでいる時、地域外部者がその多様なニーズに応じ主体のひとつとしてバックアップする必要性も十分に想定できる。

5. 多様な主体の内側から

ただ、生活文化に関する多様なニーズに、地域外部の人間がひとりで応じていくことは難しい。そのため、今後、多くの現場で、例えば、歴史学・地理学・民俗学といった人文系諸学問の「専門家」と連携する機会も増えることが予想される。その場合にも、地域の想いを受け止める姿勢を見失わないことによって住民の主体性が確保されると同時に、生活文化を見直す活動が多様な主体の連携・協働へと展開することが望まれよう。

ここで、主体のひとつとしての筆者らの関わり方と姿勢について補足したい。というのも、生活文化を見直す住民活動に地域外部者が関わるという行為そのものにも目配りしておきたいからである。

筆者らが作業中に意識したのは、「(市場原理主義の：引用者注) 政治経済状況のなかで、地域の民俗を文化資源と捉えることなどによる地域文化の安易な再解釈と転用は、ゆがんだ文化的ナショナリズムや統制を創出」⁸⁾しかねない、その動きを促すかもしれない自らの立場性である。石臼を始めとした民具や生産技術を取り上げてきた民俗学に限ってみても、「専門家」や研究者が現在の様々な生活実践(地域づくりなど)にどのように関わっていくかについては、少なからず議論が行われてきた。そこでは、前述の指摘のように政治性を踏まえた慎重な姿勢と、実践への積極的な寄与との間で模索が積み重ねられている。^{9), 10)} また、文化財行政や「民俗行政」¹¹⁾をめぐる議論も関係してこよう。

筆者らは、こうした議論を念頭におきつつ、生活基盤を弥栄自治区に持たない外部の人間として、当地における地域づくりへの関わり方に日々迷いを感じてきた。もとより、当事者としてかかわりを持つこと、その過程で生活文化が資源として利活用あるいは消費されることについて、無批判に賛同するわけではない。一方で、当事者としての責任の共有のしかたが、継続的にその地に住み、生きるという形に限定されないにせよ、ではどのよ

うな関わり方ができるのか、明確な答えを見出すことは容易でない。

しかしながら、その迷いのありかたには、「地域外部者である自分たちが、なぜフィールドへと足を運び続けるのか」という問いかけも端的に反映されている。その意味で、地域づくりに参加する時間は、自分自身の思考と向き合うという側面を持つフィールドワークが、その性格を顕著にする時間でもある。

だとすれば、まずは地域の未来を、多様な主体と共に真摯に考えていくことからしか、「地域文化の安易な再解釈と転用」に加担するかもしれない自らの立場性を考える作業は始まりえないと考えられる。

IV おわりに

本稿では、生活文化を通して表れた地域の想いを受け止める組織・人材の必要性と課題、求められる姿勢や視点を検討するために、活動当初より様々な立場の人が関係する状況にあった「石臼供養」の主体の整理を試みた。

まず、弥栄自治区において、住民の想いに対し臨機応変に 대응えられる場として公民館が機能していたことを指摘した。次に、これから連携が予想される地域外部者としての「専門家」等の関わり方について、地域の想いを受け止める姿勢によって住民の主体性を確保する必要性を指摘した。

以上の検討からは、生活文化と地域の想いに、柔軟かつ臨機応変に対応えられる組織や人材が、中山間地域の「文化資源」の管理・活用に際して求められることが推察される。

今後、地域づくりを実践・検討する上では、地域が抱える農地や林地、水源といった物的・自然資源のみならず、それらを持続的に維持・保全してきた地域住民等の人的な資源、また、いわゆる「集落機能」^{12), 13)}に代表されているような資源を維持・保全する「仕組み」といった社会的な資源等を活用することも必要である。中山間地域の自然・社会環境に基づいてかたちづくられてきた生活文化も、地域社会を支えてきたその機能や想いを緻密に記録した上で、例えば「文化資源」として管理・活用していくことが求められる場面もあろう。

その現場には、地域住民の憩いの場、地域住民の想いの受け皿、地域内外の繋ぎの場(組織)や、それらを担

う人材が必要になってくると考えられる。本稿では、公民館を中心としてその一端を報告してきたが、「集落支援員」や「地域おこし協力隊」など、地域内外を問わず地域づくりの担い手となる人材にも大いに期待される。繰り返になってしまうが、実践にあたって、上述、地域外部者の立場性、地域の主体性を確保することを念頭に置き、慎重に踏まえた上で活動へと臨むことは忘れてならない点である。

最後に、本稿では、多様な主体の連携・協働による生活文化の記録・管理手法や活用法については考察の射程に含めていない。これらの残された課題を関係主体のひとつとして検討しながら、今後の様々な実践的活動やその試行錯誤に注目したい。

引用文献

- 1) 三保恵美子：新潟市における地域学の経緯と展望，農村文化運動，185，23-30（2007）。
- 2) 敷田麻実，森重昌之：地域環境政策に専門家はどうかかわるか—地域自立型マネジメントとその実現を支援する専門家のかかわり，環境経済・政策研究の動向と展望，194-209（2006）。
- 3) 敷田麻実：よそ者と協働する地域づくりの可能性に関する研究，えぬのくに，50，74-85（2005）。
- 4) 草刈健司：浜田市の市町村合併における「浜田那賀方式自治区制度」，島根の未来を考える—島根地域政策の課題と展望，山陰中央新報社，233-254（2007）。
- 5) 中牧弘允：国内における供養モニュメントの類型と分布，宗教研究，80（4），1250-1251（2007）。
- 6) 田淵康修：公民館を活かした参画と協働のまちづくり，TORCレポート，32，47-63（2009）。
- 7) 坂本誠：鳥取県における中山間地域集落問題と対応策の検討，TORCレポート，30，92-115（2007）。
- 8) 小川直之：公開シンポジウム民俗の「創造性」と現代社会，日本民俗学会第61回年会研究発表要旨集，15-16（2009）。
- 9) 赤田光男：民俗学と実践，民俗学を学ぶ人のために，60-78（1989）。
- 10) 山下裕作：実践の民俗学—現代日本の中山間地域問題と「農村伝承」，農山漁村文化協会，（2008）。
- 11) 橋本裕之：狭められた二元論—民俗行政と民俗研究—，日本民俗学，227，253-266（2001）。
- 12) 農村開発企画委員会編：平成18年度限界集落における集落機能の実態等に関する調査報告書，農村開発企画委員会（2007）。
- 13) 農村開発企画委員会編：平成17年度限界集落における集落機能の実態等に関する調査報告書，農村開発企画委員会（2006）。